

〈女の友情〉のゆくえ―吉屋信子『女の教室』における皇民化教育―

菅 聡 子

はじめに

大越愛子は「天皇制イデオロギーと大東亜共栄圏―「帝国のフェミニズム」を問う」において次のように述べている。

近代の自由・平等・人権思想から始まったフェミニズムは、そうした思想を生みだし、それを実現していった国民国家のフレイムワークを意識せずして踏襲してきた。近代国民国家は植民地主義と帝国主義をその国家政策の主柱としていたため、フェミニズムが国家内での女性の権利獲得、性の平等を求める運動である限り、その国策を内面化し、「帝国のフェミニズム」とならざるをえない危険性に曝されていたのである。もちろんこうした罍を自覚して、独自の道を歩んだフェミニストや女性たちもいた。しかし大半のフェミニストや女性たちが、その生と性を真摯に追求すればするほど、「帝国のフェミニズム」に巻き込まれていったということは否めない。⁽¹⁾

大正期から戦後にかけて、とくに女性読者に絶大な人気を誇った作家・吉屋信子もその「帝国のフェミニズム」を体現した一人であった。吉屋の戦争協力のあり方は、これまで、「戦禍の北支現地を行く」⁽²⁾「戦火の上海決

死行」⁽³⁾等によって代表される戦地ルポにおいて分析・考察されてきた。しかし、彼女がとくに銃後の女性たちにとって強力なイデオログとなりえたのは、何より、彼女がその作家キャリアの出発時から女性たちの絆を真摯に信頼し、家父長制度において抑圧されるなかにあっても、女性たちが互いに助け合い、深い愛情を抱きあうさまを感情豊かに描き続けてきたからにほかならない。吉屋信子と女性読者たちとの関係性は、まさにそれ自体強い「絆」と呼びうるものであった。女性読者たちは、それぞれが年齢的な成長をとげるなかで、たとえば「少女の友」や「少女倶楽部」から「婦人倶楽部」へ、そして「主婦之友」へ、とその購読雑誌を変化させつつ、しかしどの誌面においても、その読者年齢にふさわしい吉屋信子の作品に出会うことができた。吉屋と女性読者の濃密な感情的交流は、各誌の読者欄から察知することができる。⁽⁴⁾そして、吉屋はその対象読者の年齢に従って物語展開や背景を変化させつつも、しかし一貫して女性たちの美しさ、その志への賛歌、女性同士の絆への信頼を描き続けた。このような吉屋がイデオログとして果たした役割は、たとえば平塚らいてうや高群逸枝、あるいは市川房江や高良とみが果たしたそれとは本質的に異なるだろう。金井景子「報告が報国になるとき 林芙美子『戦線』、『北岸部隊』が教えてくれること」⁽⁵⁾は、吉屋の講演会「北支上海現地報告」が聴衆の女性たちから「二六回も『笑声』を引き出」した点に着目し、「吉屋のことば」が持つ「聴衆と等身大の極めて親和的なもの」を指摘している。この感情的

な親和性こそ、吉屋と女性読者をつなぐものである。そのような絆を背景に、しかし何より彼女の物語作者、語り手としての力こそが銃後の女性たちを戦争へと積極的に参与させる一助となったのだとしたら、〈文学〉の戦争責任はその物語の力それ自体としてまず問われるべきである。

本稿においては、吉屋が戦争特派員ならびに海軍従軍作家として北支天津、上海、張鼓峯、漢口等を視察したあと、一九三九（昭和十四）年に「東京日日新聞」に連載した『女の教室』をとりあげ、若い女医たちの人生の諸相を彩る種々の感傷的なエピソード、そして女性たちの絆への希求が、どのような文脈をたどることで〈戦争〉へと収斂していくのか、その物語性の側面に注目しつつ考察する。あらかじめ述べるなら、本稿の目的は、吉屋信子個人の戦争責任糾弾にあるのではない。不特定多数の女性たちを戦争へと主体的に参与させることを可能にする物語の力とはどのようなものか、その一端を解明することにより、戦時下における〈文学〉の機能を考察することを本稿の目的とする。

「女の教室」と国民／皇民化教育

『女の教室』（「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」一九三九年一月一日～八月二日）は、東京女子医科専門学校（以下、女子医専と表記）で学んだ若き女医たちの群像劇である。要所要所に描かれる女性たちの友情、それぞれの個人が持つエピソードは感動のかつ感傷的に描かれており、読者の涙を誘わずにはいない。この作品が同時代読者の人気を集めたことは、掲載中よりただちに舞台化ならびに映画化が決定していることから察せられる。『花物語』（一九一六～二四）以来の少女小説によって少女たちの心をつかみ、『女の友情』（一九三三～三四）の大ヒットでその人気を不動のものとし、さらに挑戦的なタイトルである『良人の貞操』（一九三六）に

よってその読者層を婦人雑誌の女性読者から男性をも含んだ幅広い一般読者へと広げた吉屋信子が、はじめて自らの物語世界に本格的に〈戦争〉を描いたのが本作であった。

本作の単行本には二つのバージョンがある。一つは、初版『女の教室』（中央公論社、一九三九）を底本とするもので、現在『吉屋信子全集6』（朝日新聞社、一九七五）に収録されているものもこれに依拠している。多少の字句の出入りはあるものの、基本的に新聞連載時のものと同じである。もう一つは、戦後まもない一九四七年に『長篇名作文庫第五巻 女の教室』として矢貴書店より出版されたもので、新聞連載時の「学校の巻」「人生の巻」「戦争の巻」の三部構成のうち、第三部「戦争の巻」を丸々削除し、「学校の巻」「人生の巻」のみで二冊としたものである。この戦後まもない版が逆に明かすものは何か。それは、おそらくはGHQによる出版基準に抵触するものとして削除された第三部「戦争の巻」こそ、この作品の方向性を決定するものであるという事実である⁸⁾。実際、第二部の末尾は仁村藤穂の「いくさって、切ないわねえ」という感傷の言葉で締めくくられており、この時点ではまだ、第一部から二部において配置された七人の「グルッペ」たちそれぞれの試練は試練のまま、どこへ向かうのかまったく不明である。よって、戦後版のように第二部でこの物語が終われば、日中戦争に対する評価も宙に浮いたまま、作品自体が価値判断を保留した状態で読者の前に提示されることになる。第一部・二部に配置された種々の伏線が、あるべき（銃後の女性）像へと収斂するのが第三部なのである。

「戦争の巻」の終盤、七人の「グルッペ」の一人、伊吹万千子は次のように述懐する。

藤穂さん、戦争は弾丸を撃ち合うそればかりでなく、人生には眼に見えない戦争が、幾つもあると思うの、そして、人間はいつもそれに従

軍して行くようなものね。

(「白十字」)

「人生」を「戦争」にたとえるその比喩自体は陳腐なものだが、この作品においては、「学校の巻」「人生の巻」という配置が最終的に「戦争の巻」へと収斂していくその構成がそのまま、七人の「グルッペ」たちが女性として「戦争」にどのように参与すべきなのか、いわばその〈銃後の女性〉としての〈教育〉のプロセスとなっている。この〈教育〉がなされる場こそ〈女の教室〉なのである。物語内時間は、一九三六年春から一九三八年春までとなっているが、この間の人生の〈女の教室〉において、それぞれが障害・困難に直面しながら、理想的な女性国民、〈銃後の女性〉として〈教育〉されていく。

では、一九三九年に発表されたこの作品は、読者の〈現在〉にとつてどのような意味を持ち得たのだろうか。前述のとおり、物語時間は一九三六年春から一九三八年春まで、すなわち、一九三七年の日中戦争勃発の間にはさんだ時期に設定されており、その結果としての〈現在〉を読者たちは生きていることになる。もともと、作中における日中戦争勃発の扱いは表面上小さい。「一九三七年の夏」の章題のもと、連載回数として二日分、単行本では一章分がさかれているものの、話題のほとんどは轟有為子の兄の帰国の知らせによって占められ、わずかに「あゝ、たまらないわ、通州事件!」「つまり、この悲惨な事件を通じて、日本も反省しなければならぬんだわ」「どうかして、戦争せずに、うまく支那とやってゆける外交官はいないのかしら」等の言葉が記されるにとどまっている。しかし、作中、戦争が七名の「グルッペ」たちの人生に色濃くその影をおとし始める「人生の巻」以降、「学校の巻」ではまだ世間知らずであった彼女たちが、徐々に〈銃後の女性〉として教育されていくそのプロセスを、物語全体の展開を通して読者は追体験することになる。

作品連載時、すなわち読者にとつての〈現在〉においては、盧溝橋事件に端を発し、南京陥落までの「一九三七年」、すなわち日中戦争勃発の緊張感と高揚は、内地においてはすでに常態化した戦時への倦怠と気の緩みへと後退し、悲惨な戦争状態のさなかにある前線との懸隔は甚だしいものとなっていた。⁹⁾ 前線と内地との懸隔、内地の危機感の欠如は戦況それ自体とは別の、深刻な問題であった。女性たちにおいても、たとえば〈銃後の女性〉の奉仕としてはもともと奨励された慰問袋の送付について、日中戦争勃発当初の熱狂はすでに冷め、その送付数も減少し続けていた。¹⁰⁾ のみならず、「三越デパート」「大阪の大丸」は「慰問袋の趣旨から外れた豪華な既製品を売っていた」という。慰問袋は「女性であれば、どのような社会階層であつても、また年齢を問わず、銃後から前線へと動員する政治的道具」であり、「女性を介して、戦場と銃後とを結びつけ、国民の一体感の形成を促す」ものであるはずだったが、肝心の「真心」が欠如した既製品の慰問袋は、たとえ中身が高級品でも、受け取った兵士たちを甚だしく落胆させた。¹¹⁾ 彼女たちはあらためて教育され直す必要があつた。すなわち、女性読者たちにとって、『女の教室』を一九三九年現在において読むという行為は、日中戦争勃発前後から現在までをたどり直し、あらためて自らを理想的な〈銃後の女性〉として教育し直す、再教育あるいは矯正教育としての意味があつたと言える。

『女の教室』において、その教育の効果が最大限に発揮されるのは、作品中でもその登場回数が最も多い仁村藤穂においてである。ともに登場回数が多い藤穂の親友・轟有為子が、禁欲的な優等生で、人間性としても潔癖かつ誠実な若い女性として造形されているのに比して、藤穂は贅沢このみの「意気な」女性である。寮の自室では舍則に背いて化粧に余念なく、「一生にたった一度、女が異性に感じ得る、大事な刺激と感激」を「結婚」に求める。匂うような美しさをたたえた彼女の最大関心事は「おしゃれ」

であり、生活のすべてにわたる消費家でもある。いわば藤穂は、一九三九年現在、帰還した兵士たちを落胆させた銀座を歩く女たち、その消費性を体現する存在と言えるだろう。兄の出征の知らせよりも不意の訪問者の前に素顔で出てしまったことに拘泥する藤穂は、有為子の義兄・竜一との不倫の誘惑に傾く彼女を称して有為子という「お妾の生活もあつた母の血を受けて育つた、このひとが、兄のような有閑階級の消費性のジレツタントの瀟洒な美青年に、魅かれたのも、持って生まれた〈女〉の約束」の語に象徴される女性である。いわば、彼女は戦時下における〈女の教室〉の劣等生であり、最も矯正を要する存在なのである。よって、彼女が劣等生から理想的な〈国民Ⅱ皇民〉へと教育されるためには、大きな犠牲が必要であつた。ひとつは兄・英吉の戦死であり、ひとつは親友・有為子の死である。

英吉の実父であり有為子の継父にあたる温泉旅館「北雲閣」主人・大野浦五郎は、「八年」の前科者という過去の持ち主であつた。一方、藤穂の実父は「浜町の大きな産婦人科の院長博士」であり母はその囲い者であつた。しかし、父の死後「告別式の御焼香も許さ」ず「縁切りのお手当も鏝一文出さずじまい」の「御本宅の仕打ち」ゆえか、藤穂は現在も母の実家の名字を名乗っている。浦五郎からは実の娘以上に溺愛されているにもかかわらず、母が正式にその後妻となつたあとも、大野の籍には入っていない。すなわち、藤穂においては〈父の名〉をめぐる混乱が存するのである。その混乱はそのまま、藤穂のノンシヤランな造形それ自体として表象されている。帰省中に母から示された義兄・英吉との結婚話を拒否して東京に逃げ戻つた際は、「いっそ、カフエの女給にでも、なろうかしら」と口にして「莫迦!」と有為子に一喝される。京都の府立医大の微生物学教室に入つた有為子に伴われて同地の開業医院に小児科医として勤務している折りは、一方で「全女医の名誉の為に!」と真摯に医師として献身し、し

かし同時に初任給のみならず継父からの祝い金まですべて「朱塗りの鏡台」等の贅沢品に消費する。有為子の義兄・竜一の誘惑の前には、「成熟した〈女〉の魂」をおののかせる。彼女は確固とした存在の根をもたず、つねにあやうく揺れ動く存在である。そのような彼女の前に差し出された最大の危機は、たとえば医師としてのアイデンティティといった彼女の公的身分にかかわるものではなく、前述の竜一との不倫の誘惑であつて、彼女の私的領域における倫理的・婦徳的危機である。

この危機から藤穂を救ふことになるのは、兄・英吉の戦死と親友・有為子の死であつた。英吉の戦死の報に接し、遺品の日記を読んだ藤穂は「自分の心」が「清め」られ、「人をそこなう（恋愛）をいさぎよく清算」すべきことを悟る。さらに、竜一との不倫の回避は、危機に瀕していた有為子との友情を復活させるのみならず、竜一のドイツ人妻・エルマとの間にも友情を形成する。実際、エルマは「日本の女のひと、ほんとに立派なところ、よくわかりました」「その国のうち、その国の女のひとを見ると、すぐにわかります」「国民みな、そのお母さんから生まれます―日本の女のひと見るとその国民のことよくわかります」という言葉とともに夫を伴いドイツに帰って行く。藤穂と同じく不良国民であつた竜一は、「竜の家、お金あるから遊んでいる、それ、いけません。ドイツなら、ヒットラー許しません」というエルマの言葉が示唆するように、理想的男性国民となるべく、ドイツの地で同じく再教育されることになるだろう。

英吉の名誉の戦死がもたらすのは藤穂の矯正だけではない。かつて「やんごとなき高貴な御方」来道の折り、北雲閣は浦五郎の前科のため「名誉あるその御泊り」の宿泊リストからはずされていた。しかし英吉の戦死後、「名だたる将官」渡道の際には、「その将官の一行の宿られる名誉の旅館」に名指されたのみならず、将官から直接「一人息子に戦死されて―お気の毒だったなあ―だが、お国の為だ、我慢して貰いたい」という慰撫の言葉

を与えられ、浦五郎は感激のあまり号泣する。英吉の戦死は、前科者としての浦五郎の過去を清算し、それどころかより大きな〈父の名〉の代行者による〈承認〉まで与えたのである。さらに近い将来、有為子の死の床で誓ったとおり、藤穂は有為子の弟・麟也―盲目の美青年―の妻となり、有為子の父、すなわち「元勸銀の総裁」であった父の名のもとに編成されることになるだろう。その前提として、藤穂は「お義父さん、私をほんとの娘にして、この籍に入れて下さって、お義父さんの娘、お兄さんの妹として」嫁に出してくれ、と嘆願する。藤穂をめぐる〈父の名〉の混乱は、その最高位に存する者による〈承認〉のもとに序列の安定を与えられ、彼女は理想的な女性国民、〈銃後の女性〉としてこれから生きることになる。

菊の花と女性たちの絆

大西巨人「ハンゼン氏病問題 その歴史と現実、その文学との関係」¹²⁾は、当該論文発表時の一九五七年現在においてもなお、ハンゼン病についての犯罪的ともいえる大きな誤謬がまかり通っていることを起点に、「癩政策を貫流した「感傷主義」、或いは感傷主義とのみ呼び済ますにはあまりにも凶暴なものは、近代日本の半封建性・非民主性を象徴している。同様に、諸作品に見られる癩への感傷主義は、日本近代文学の非社会性と狭隘性とを如実に表象している」として、森田草平『輪廻』をはじめとする複数の作品を「作品への「癩」の登場が「主題」としてあれ、副次的なものとしてであれ、一般的にそこに現われたのは、癩への業病・天刑病視であり、癩患者への生きる意味を喪失した社会外人間視であり、癩問題一般なかんづく癩家族問題の社会的性格への無視である」として厳しく批判した。論中、大西は古屋信子『女の教室』について次のように言及している。

木下宇陀児作『星史郎懺悔録』、古屋信子作『女の教室』の如きにあつては、ストーリーをメロドラマティックに展開するための小道具として、一篇に新派悲劇的乃至スリラー的色彩を添えるためのアクセサリとして、一種の安易なdeus ex machinaとして、完全な感傷主義的無責任に立脚する癩の取り扱い、「癩の恐怖」の煽動が実行されてきたのである。

「メロドラマティックに展開するための小道具」「アクセサリ」「安易なdeus ex machina」とはある意味での大西の逆説的過小評価である。本作の叙述がどのような影響を同時代の読者に及ぼし得たか、あらためて指摘されねばなるまい。七人の「グルッペ」の一人、伊吹万千子の「瀬戸内海の島のレブラの療養所の医局」への赴任は、本作における女性の皇民化教育の到達すべき目標を具体的に表象する、重要な事例として提示されているからだ。

『女の教室』においては、七人の「グルッペ」がそれぞれ自らの人生の節目で直面する困難と、そしてその困難の克服が女性としての成長の指標として描かれているが、伊吹万千子におけるそれは、「人生」という〈私〉の領域における悲劇が、大きな〈公〉、戦時下における公共性への奉仕に対する没入の契機へと転じることで、〈私〉から〈公〉への昇華の可能性として表象されている。

伊吹万千子は、七人の「グルッペ」のうちでも最も恵まれた家庭環境を与えられている。父は神田の有名な医院「応仁堂」の院長にして医学博士、二人の姉はそれぞれ、「父の病院の外科部長の新進の博士」夫人、「内科部長」の「医学士」夫人としておさまっている。出身女学校は「白百合女学校」、「成績が二人の姉に勝ってよかった事から」父の意志を受けて女子医

専へ進んだ。しかし末娘の彼女は、たとえば病院の後継者としての束縛からは自由であり、自らの人生を自ら選ぶことが可能な状況に置かれている。母はすでに死去しており不在だが、その代替は長姉多美子に委ねられており、彼女自身も母代わりの自覚とともに末妹の万千子をいつくしむ。

このような環境は彼女を罪のない「お嬢さん」として成長させており、女子医専入学後初めての解剖実習の折りにも、そして本科四年生という最高学年の現在の「お産」の見学においても気絶してしまう彼女は、有為子から「から弱虫さ!」と言われる始末である。「気絶姫」というあだ名を同窓生から奉られていた彼女、誰の目から見ても「お嬢様女医」であった彼女を大きく転身させたのは、恋人・宇津木恵之助の自殺であった。彼女からの結婚申し込みに際し、伊吹家がその家庭環境・血族を調査したところ、「あの分家、すなわち恵之助君の父親の方は、確かにレブラで天死した」という事実が発覚したのである。その事実を初めて知った恵之助は絶望のあまり服毒自殺した。この事情を「宇津木百万長者の総本家の老主人」小左衛門ならびに義兄・松尾医学士から聞かされた万千子は、自ら「救癪事業」に身を投じるのである。

このエピソードについて、前述の大西巨人は「ストーリーをメロドラマティックに展開するための小道具」と批判していた。しかしこれは誤読である。この万千子をめぐる一連の物語は、大西が同論文中でキーワードとした「感傷主義」の出典として言及した太田正雄（木下圭太郎）「映画『小島の春』」が「感傷主義が世に胎つた最上の芸術」とし、また吉屋の『女の友情』を口を極めて酷評した小林秀雄をして「近頃読んだ本のうちで、最も感銘深いもの」¹⁴と感激せしめた、一九三八年刊行のベストセラー、小川正子『小島の春』（長崎書店）を明白に参照して構成されたものである。小川正子自身、女子医専出身の女医であった。万千子が赴任したのは「瀬戸内海の島のレブラの療養所」「愛生院」の医局であるが、これは小川が

所属していた岡山県長島「愛生園」と、『小島の春』で描かれた小川の検診の土地のひとつが「瀬戸内海の一つの島村」であったことからの設定だろう。

一九九六年の「癪予防法」廃止を直接の契機として、刊行後まもなくベストセラーとなり、映画化もされ賞賛の言葉につつまれていた『小島の春』は、現在、絶対隔離主義に基づく暴力的な患者収容、さらにそれを通じての「民族浄化」国策への奉仕において厳しい批判の対象となっている。代表的言説として、荒井英子『ハンセン病とキリスト教』¹⁵から引用しておく。

「皇恩」を強く訴えながら、「癪」の伝染・絶対隔離の必要を説いて患者収容に奔走するその姿は、「救癪の天使」「白衣の戦士」「救癪の聖医」と賞賛され、小川は女性的・キリスト教的ヒューマニズムの象徴、さらには救済的機能さえ付与されて神話的存在にまでなった。しかし結果としてそれは、当時の医学水準でいっても必要でなかったハンセン病患者の絶対的隔離を正当化し、社会の偏見を増大し、患者とその家族の人権を奪うこととなった。

『女の教室』では、万千子の口をとおして、この『小島の春』で喧伝されている「絶対隔離」の正当性が主張されている。「何より先に、まずこの病気だけは、絶対に隔離療法が必要でしょう」「日本では、天刑病という迷信から、家を追われて、さまよって流浪のうちに、黴菌を撒き散らして、こんなに国中にふやしてしまっただけですからね」。もちろん、医学情報においてまったくの素人であった吉屋信子が、参照資料の学説をそのまま引き写したであろうことは想像に難くない¹⁶。しかし作中では、医師一家である伊吹家において、ハンセン病が「遺伝」ではなく「伝染病」であ

ることを強調する一方、「本家の方には、かつてその血統はなかったというのだが」「なんとしても、その親の血を受けた恵之助君とは——」とその迷妄かつ差別に満ちた遺伝説を補強するような発言が記され、また宇津木家をとりまく「宇津木長者の、黄金花さく土蔵のなかに、毒が流れる日に三度」という小唄を村の噂の一例として示すなど、その認識自体が不安定でかつ混乱している。さらに、「祖国浄化・民族浄化」の名のもとに「療養所以外には、一人の癪者なしという、ほんとの文化国にしたいの」と、根本的に誤りであった「絶対隔離」の正当性が、万千子と藤穂という二人の「女医」、すなわち専門家たちの間でくり返されることによる同時代読者への影響は多大なものであったろう。その意味で、本作は戦時下の「絶対隔離」政策を補強し、ハンセン病への差別を助長した言説としての責任を負わねばならない。

さて、あらためて万千子の物語が持つ女性の皇民化教育における意味を確認しておこう。有為子の死後、理想の女性国民としての再教育の途上にある藤穂が、その教育の仕上げとして訪れるのが、「救癪事業」に献身する万千子のものであった。万千子は「なにか強く凛々しく、清い気魄を含ん」だ姿で、一足先に理想の女性国民としての成長をとげて藤穂の前に現れる。

療養所の入り口で、藤穂の眼をまずとらえたのは「皇太后陛下御歌記念碑」であり、「つれづれの友となりても慰めよ／行くことかたきわれにかわりて」の「皇太后陛下御歌」であった。「藤穂はしずかに、首をさげた」。

日本における「救癪事業」は、貞明皇后の主導のもとに行われた。その契機となったのが、一九三二年十一月十日、大宮御所御歌会で「癪患者を慰めて」と題し詠まれた「つれづれの」の歌であった。荒木裕樹「御歌と〈救癪〉」によれば、この歌は自らは「行くことかたき」貞明皇后の、慈悲の媒介者としての承認」を「隔離政策施政者」たちに与えたという。

万千子が家族に「癪病院」赴任の意志をつげた際、「折から、その伊吹家門前の音羽の通りを」「出征兵を送る列が通るらしく」「今ぞいでたつ父母の国／勝たずば生きて帰らじ」と歌声が響いた。「出征」との重ね合わせは『小島の春』でも同様で、そこに「明確に打ち出されているのは、貞明皇后を頂点に据えた皇軍のイメージであった」⁽¹⁸⁾。「私、こんなところになりますから、グルッペの皆様とも、もうお会い出来ないかも……でも、いつかは——いずれ、誰方とも天国で、おめにかかれると思ってるの」と告げる万千子は、皇后の〈承認〉を受けた女性戦士として、まさに〈滅私奉公〉を体現する存在となったのである。そのような彼女の姿は、藤穂のまなざしを通して「茜さす雲に入る聖女の姿」という表象に収斂する。「から弱虫」で「お嬢様女医」であった彼女、女子医専在学時の「癪院」「全生病院」見学の折りは、「私たちも女医となった以上は、いざとなれば、ああしたところで働く覚悟が必要ね」と「決然と」する有為子に対し「私は駄目。絶対に——とても——弱虫なんですもの……」と「恥じ入って」いた万千子は、皇后の代行者としての「聖女」へと昇華されたのである。

伊吹万千子と同じく、七人の「グルッペ」のうちでは恵まれた家庭環境にあり、さらにその「人生」も平穩無事に過ぎていくようにみえるのは細谷和子である。在学時より弓削士郎と婚約しており、卒業後すぐに結婚した和子は、夫の女性尊重主義により、まさに「琴瑟相和す」状態にあった。さらに、婚約時には和子が医師として働くことに難色を示していた士郎は、結婚後考えを変えて、自ら勤め先の工場に新設される診療所医師に和子を推薦する。間もなく妊娠がわかり、幸福の絶頂にあった和子の前に示された試練の予兆が、夫の出征であった。物語時間内に示された数々の伏線が形作る文脈が示唆するのは、物語時間の外部、すなわち未来の時間において、和子が戦争未亡人となるだろうことである。士郎自身、未亡人の母の女手一つで育てられた。出征時の「和さんも、教養はあるし、女医の

職も持つてるし、僕は、その点、なんらの後顧の憂い」もない、という土郎の言葉は、「前橋の女学校の先生」であつた母と同じく、職業婦人としての自活の道が女医・和子に備えられていることを示唆している。産褥で彼女が読みふける手紙に記されていたのは、聖戦の戦士・土郎による「人間のあらゆる本能的の卑しい利己心から完全に解放されて国家民族への忠実と名誉を負い美しく偉大な崇高な日本への信仰と愛の為にこそ、僕らは戦い、かつは、死をも辞さないのだ」という決意であつた。

婚約時より、土郎は菊作りを趣味としていた。大らかに咲いた「白菊の大輪」を残し出征した夫にかわり、和子は土郎丹誠の菊を工場の菊花品評会に出品する。そこに添えられた「菊の主聖きいくさに召されたり」という和子の句にひそかに涙を宿した審査員長・若き社長夫人は、「この花、かならず一等特選にしてあげて下さらない？お願い！」と口にし、同行の工場長たちをあきれさせる。皇室ゆかりの菊の花、そこに添えられた句を媒介に、社長夫人と一部下の妻と、まだ直接会つたこともない二人の女性の間に、新たな絆が結ばれる。身分的差をこえて、菊の花の承認のもと、女性たちの絆が結ばれるのである。この階層差をこえた女性同士の絆は「グルッペ」の内部においても形成されていた。

博士論文執筆の志半ばで研究対象であつた細菌に感染し死んだ有為子は、自らの志を託す相手として蠟山操に遺産を残す。ともに東京女子医専開校以来の秀才として首席を争つた二人は、しかしその成育環境においては雲泥の差があつた。すでに言及したように、有為子の亡き父は「元勳銀の総裁」、死後も有為子たちが生涯不自由なく暮らせる財産を残した。有為子の出身は数ある女学校のなかでも最高のステイタスを誇る「女高師附属高女」である。一方、操の亡き父は「県立病院の院長の車を挽くお抱え車夫」で、出身も「専検」である。入学式の折、「出身の女学校はございません……」私は、専検でございます」と、「肩身せまげに」口ごもる操に、

嵐のような激励の拍手が「堂をゆるがす」場面は、『女の教室』でも感動的な場面の一つである。有為子が「京都の府立大学の微生物学研究室」に所属したのに対し、「母校の病理学研究室」で助手をしていた操は、母の病気のため研究生活を断念し、「東北の無医村診療所」へと赴任すること余儀なくされる。この山深い農村での医療活動、とくに「狐憑き」等の村人たちの迷妄を科学的に啓蒙しようとする操の医療行為は、一九三八年一〇月以来の「国民精神総動員」運動がとくにその対象を農村の文明化においてのことと歩みを同じくしている。操自身も、学生生活の断念による絶望から、「国家の民衆保健の為に尽さねばならない！」という思いへと自らの姿勢を立て直す。その契機となるのは、赴任先へ向かう途中、同じ列車に乗り合わせた一人の「出征勇士」とその母親との出会いである。無医村への彼女の赴任も、万千子のそれと同じく「出征」と重ね合わされている。そもそも、彼女が時季はずれの赴任先を得たのも、前任者の男性村医の「出征」ゆえであつた。女性である操はその代理として「無医村」という戦地に赴いたのである。

本来、操の志は「学位の問題を離れて、もっと大きな科学へ、基礎医学への研究に、生涯の生甲斐を覚える」ゆえのものであつた。志半ばで病に倒れた有為子からその遺志を託され、「學術の貴い犠牲に――」と号泣する操は、有為子から自身へと「渡されたバトン」を受け取る。有為子と操の間においても、成育環境の格差をこえた女性の絆が結び直される。物語の終盤、有為子の墓参をとげた藤穂・操・和子の三人は、「靖国神社」へ向かう。それは、有為子の「學術の貴い犠牲」としての死が国家の発展のための一種の戦死であつたという意味づけ直されることでもある。

すなわち、人生の〈女の教室〉において新たに形成される〈女の友情〉とは、皇后をその頂点かつ中心として、すべてが等しくいわば（一視同仁）に再編成された女性たちの精神的共同体である。「グルッペ」たちの〈私

において結ばれていた友情の絆は、皇后の〈承認〉のもと、さらに大きな〈公〉に奉仕するものとして結び直される。そしてこの〈一視同仁〉の絆は、「内地」の女性たちに限定されるものではなく、その外部へと拡大していく。

「グルッペ」最後の日々、卒業アルバムの撮影のため、一同はすでにそろって「靖国神社」を訪れていた。その折り、「グルッペ」のなかには中華民国からの留学生・陳鳳英がいた。彼女の存在は何を意味するのだろうか。

〈女の友情〉のゆくえ

一九三九年九月、当時日本において「日支の平和を結ばんとして立つた新しい英雄」として知られていた汪兆銘を上海に訪ねた吉屋信子は、自らの著作『女の教室』の単行本を手渡した。「この近作のなかに、私が支那事変後、今更に中国の若き女性に思ひを寄せるあまり、その作中の女主人公の一人に、陳鳳英なる中華民国の日本留学生を描いたゆえに、その理由で献本したかった」¹⁹からだという。

中華民国からの留学生・陳鳳英は、近代化された中国の象徴として登場する。七人の「グルッペ」の一員としての地位を与えられていることから明らかに、陳鳳英は他の日本人「グルッペ」たちと同等の、いわば話すに足る存在としてある。卒業アルバムの写真撮影のため靖国神社を訪れた際、七人の「グルッペ」は遊就館へと向かった。館内に飾られた日清戦争戦勝の、鳳英にとっては「祖国の敗戦を語る」記念品を彼女は熱心に見、「気の毒さ」に「ひやり」とする友人らを尻目に、「これ、私の国の清朝時代の弱い軍隊のものです……このような文明に遅れたものを使えば、駄目ありますね」「いまは、中国の軍隊、ちがいます、文明のものです」

と言つてのける。「南京軍官学校出身の飛行将校」を夫に持ち、卒業後は「南京のロックフェラーの財団病院」に就職が決まっている彼女、「英文聖書」の「新しき酒は、新しき革囊に入るなり」の章句に傍線を引き、日記に「以新酒注旧革囊者、這是我們中国的現状、真是可悲。以新酒注新革囊者、這是造成日本明治維新後的隆盛之因、真是可羨的呢」と書き付ける彼女は、帝国日本が大東亜の兄弟として自らの傘下に置こうとしている近代中国の表象なのである。

ここで七人の「グルッペ」たちが「日清戦争」の栄光の記憶に立ち会っているのは偶然ではない。たとえば、吉屋が専属契約を結び、その戦地ルポを次々と発表していた「主婦之友」に掲載された「明治天皇御製／昭憲皇太后御歌 皇軍将兵の上に畏き大御心」²⁰は、明治天皇・昭憲皇太后の日清ならびに日露戦争歌を菊池寛による解説を付して紹介したものである。菊池はその解説で「今事変に際して、そのまゝ拝誦してよいもの」「今事変の情景にも、ピッタリ適合する御製」とくり返し述べている。ことさらに「北支の地」「満洲の野」「上海」「山西省」と地名を記すことで、読者の〈現在〉と記憶が重ね合わされる。そして過去の栄光の戦績が、天皇・皇后の歌を媒介に呼び起こされるのである。このような記憶の再生・重ね合わせにより、明治大帝の威光が読者の〈現在〉により、帝国日本が歩んできた〈近代〉の正当性を保証する。

だが、『女の教室』に登場する東アジアの女性には陳鳳英のみではない。近代中国の象徴・陳鳳英と対照的に描かれているのが「朝鮮の女」桂玉である。「グルッペ」の一人、羽生与志は、姉の借金——といっても、与志の学費を調達するためだったが——返済のために、女子医専附属病院での勤務を断念し、「満洲熱河省烏丹城」へと赴く。その「沙漠の果」の地において唯一の医師である彼女は、まさに文明・文化の象徴である。「烏丹城メソジスト教会副牧師」鮎川哲は「日本の智的な階級の女性」である与志に

惹かれていくが、その妻・桂玉は、文明を象徴する与志の対極として造形されている。「眼も眉も細い扁平な顔立」、動作はつねに「のっそののっその」と、「無教育で無知で―その上、少し魯鈍な生れ付き」と夫から「幼い女の子」のように扱われるという造形には、その劣位があらさまに表象されている。だがそのような〈劣った〉民の女性にも、与志は「へだてない女友達になりたい」と友情の手をさしのべる。「グルッペ」時代、彼女が陳鳳英と最も親しい友であったのは偶然ではない。すなわち、羽生与志は、「世界の果」のような蒙古の砂漠で、新しい中華民国の女性とは友として手を取りあい、劣位に置かれた韓国女性にはその野蛮性を文明化すべく手をさしのべ、「亜細亜民族の結合の貴い楔」となる使命を負った日本の若い知性なのである。

彼女に課せられた使命はそれだけではない。鮎川は、与志に「デュデガルド・クリスティーの書いた、Thirty Years in Moutden」中の、日露戦後、「日本国民中の最も低級な、最も望ましくない部分の群衆がこの土地へ続々と」入り、その暴虐によって「満洲人の、日本への信頼と救い主として縋る心のすべてを、もののみごとに幻滅と失望で破」ったという叙述を示し「羽生さん、貴女も僕も、いまこそ過去のおろかな日本人の過去の償いに、ここで働く使命を帯びているのではないでしょうか？」と訴える。当該書が矢内原忠雄によって『奉天三十年』のタイトルで翻訳出版されたのは一九三八年九月、この場面における引用は、矢内原の翻訳中「第二十章 無辜の苦しみ」に拠っている。矢内原は「訳者序」において次のように述べている。

満洲及び支那問題の解決、即ち東洋平和の永久的基礎は、満洲人及び支那人の人心を得ることではなければならない。而してそれは国家としての愛撫政策を以ては足りない。況んや国家を背景とする公私の利得

的行動を以ては達し得られない。人間としての無私純愛の生活態度を以て、彼等のために深く、且つ長く奉仕する個人こそ、東洋平和の支柱であり、その如き人間をば満洲及び支那に供給することこそ、日本国民の名譽でなければならない。⁽²⁾

「一八八三年（明治十六年）スコットランドの医科大学卒業生クリスティーの抱いた如き志が、我が日本の青年学生の間からも起れ！」との矢内原の檄に応じて、この「大陸」へと配置されたのが与志なのである。

そのような彼女の前にあつた最大の危機は鮎川哲へのほのかな恋愛感情だが、それは桂玉の脅迫的自殺未遂と、それに屈して「更に蒙古の沙漠の奥深く」へ諦念とともに去っていった鮎川によって回避される。「個人的のすべては、公けの職場にあつて、打ち棄てられねばならない」。与志の〈私〉における危機は〈公〉への奉仕によって清算され、志も新たに「忠実な女医」としての使命を全うしようとする和志の耳に、「漢口が落ちた！」の歓呼の声が聞こえる場面です。『女の教室』は終わっている。与志がかつての親友・陳鳳英の「野戦病院に手術着」で立つ姿を「抗日画報」に掲載された写真に見出し、「隣邦の友」に思いをいたしながらも、「東亜の新しき平和は、いつ新しい支那に入れられるのであろう―？」とその志向が一元化されるところに、この作品が描きだした〈女の友情〉が、帝国日本が標榜した大東亜共栄圏思想に完全に回収されてしまったことが露呈している。

この陳鳳英の造形に、吉屋信子は深い思い入れを抱いていた。一九三八年九月、海軍従軍作家として上海にあつた吉屋のもとを、一人の「支那婦人」が訪ねてきた。それは、十数年前、吉屋と「亜米利加宣教師」のもとでよく顔を合わせていた「支那留学生王英」であつた。陳鳳英はこの旧友をイメージして書かれたという。⁽³⁾

思いがけない再会を、吉屋は次のように記している。

あゝ、思へば、なんの奇遇ぞ！十幾年のそのかみ、日本に留学して友たりし、この人の国と戦ふ日本となり、彼女は敗戦国の女性として、上海租界に逃れ、われは勝いくさの皇国の、海軍婦人従軍記者として、こゝに相まみゆる。感傷の涙湧き出づる、止めがたし。²³⁾

しかしその「感傷の涙」は、「いまはく、個人的の感傷などに溺れるのは、まちがつてゐる。日本は、東洋平和の大きな基礎」として戦っている、そしてその勝利の暁には「その戦渦を百倍して償ひ得る、美しく清い永遠の大きな平和の鐘が、両国の人々の耳に、鳴り響くのだ！」²⁴⁾「あゝ、その日まで、堪へ給へ、待てかし、わが友、王英よ！」というさらなる「感傷」に満ちた言葉によつて封殺される。かつて『花物語』の頃、体制への密やかな叛逆の砦としてあつたその〈感傷〉は、いま、〈皇国〉の大儀に奉仕するものとなつたのである。

おわりに

藤穂の矯正教育の契機となつた有為子の死は、もう一つの意味を持つていた。それは、同性愛の欲望の封印である。吉屋が描く〈女の友情〉にはつねに、密やかに同性愛の欲望が息づいていた。『女の教室』も例外ではない。有為子が藤穂へ寄せる心情はあくまで友情として描かれているが、彼女をめぐる言葉の数々――「いつまで――こうして、私たち仲よく一緒に生活出来るかしら？」「貴女にも、いまに好きな異性が出来ればやはり結婚したくなる――あゝ、その時は、私すこし参るな」――この同性の友を、どんなに愛していたか――誰よりも自分が、よく知っていた――は、物語の

表層においては抑圧されている女性同士の愛情の文脈を隠し持っている。だが、帝国の禁忌にふれる女性同性愛は、戦時下の〈女性の友情〉の一部として容認されることはない。よつて、物語は有為子の死をもつて、女性同性愛の欲望を抹殺しなければならなかった。

吉屋信子『女の教室』には、女性同性愛への秘められた欲望も含め、女性同士の種々の絆が描かれていた。吉屋の卓越した物語作家としての力は、読者の感傷の涙を誘わずにはいない。吉屋が生涯抱き続け、描き続けた〈女の友情〉への信頼それ自体が真摯なものであつたことは疑いようがない。しかしそれが真摯なものであつたがゆえに、言い換えれば、あらゆる階層や差異を越えて女性たちは手を携え合うことができるはずだという彼女の信念こそが、〈一視同仁〉を装う大東亜共栄圏思想との接続をもたらしただとしたら、その陥穽を明らかにすることは、吉屋信子文学の可能性と限界を考察するうえで必須の作業であろう。さらに、彼女の文学が備える〈感傷〉の力は、決して過去の時代にのみ生きるものではない。現在、私たちの生きる〈いま・ここ〉は、かつて戦時下に蔓延した〈感傷〉の物語の変奏――愛する者を守るため、自分は戦場に赴く――にとりまかれている。近年、大東亜戦争の物語を〈愛〉の物語として語り直す映画の数々が制作されたことは記憶に新しい。愛する者、いたいけな者たちを守るために戦場に赴く。――このシンプルな〈感傷〉の物語に、しかし誰が抗うことができようか。私たちにできるのは〈感傷〉の機制を明らかにし、物語に伏在する力をひとつひとつ検証すること、そしてこの行為の積み重ねのうちに物語に抗する力を見出すことだろう。その地道な作業を通じて私たちはようやく〈文学〉の戦争責任に向き合うことができる。

女性同性愛の封印としての有為子の死は、同時に、危うく失われようとしていた有為子と藤穂の友情を復活させる。のみならず、その死ゆえに、藤穂は永遠に有為子との友情を心に保ち続けるだろう。京都に移り住んで

まもなく、有為子は藤穂との散歩中のやりとりを思い出して「一人で笑いかけた」。いぶかしむ藤穂に彼女は言う。「だって、さつき南禅寺で、二人ともセンチになったの思い出してーとうとう貴女まで、結婚しないのなんのってーまるで少女小説だったわね…」。「少女小説」の夢は潰えたのだろうか。時代の大儀を謳う言説に、女性たちの言葉は何ら抵抗することができなかったのだろうか。この点については、別稿を期したい。

註

- (1) 大越愛子「天皇制イデオロギーと大東亜共栄圏―「帝国のフェミニズム」を問う」岡野幸江・北田幸恵・長谷川啓・渡邊澄子編『女たちの戦争責任』東京堂出版、二〇〇四年九月。
- (2) 吉屋信子「戦地の北支現地を行く」「主婦之友」一九三七年十月。
- (3) 吉屋信子「戦火の上海決死行」「主婦之友」一九三七年十一月。
- (4) 拙稿「吉屋信子『花物語』『女の友情』―《花物語》のゆくえ」(江種満子・井上理恵編『20世紀のベストセラーを読み解く』学芸書林、二〇〇一) 参照。
- (5) 金井景子「報告が報国になるとき 林美美子『戦線』、『北岸部隊』が教えてくれること」菅聡子編『国文学解釈と鑑賞』別冊 女性作家『現在』至文堂、二〇〇四年三月。
- (6) 「女の教室 豪華な配役で東宝が映画化 ヒロイン女優募集」(『東京日日新聞』一九三九年五月九日)「女の教室ヒロイン女優決定 麗人の銀河の中に光り輝くあすの明星」(同六月二十日)「広告 東宝劇団七月興行 夜の部・女の教室 有楽座」(同七月一日)等。
- (7) たとえば、全集版で「母の手紙」とある章名は、「姉の手紙」の誤植である。

- (8) この作品は戦前・戦後を通じて複数回映画化されているが、「花の恋人たち」のタイトルで一九六八年に制作されたもの(監督・斎藤武市、主演・吉永小百合)は、「学校の巻」「人生の巻」のみに依拠している。
- (9) 井上寿一『日中戦争下の日本』講談社選書メチエ、二〇〇七年七月。
- (10) 盧溝橋事件より一九三八年六月までの送付数は「七八七三四七〇」個、三八年七月より三九年六月までは「六八八六三九五」個、三九年七月より十二月までは「三二四七八七七」個であった。註9資料による。
- (11) 註9に同じ。
- (12) 大西巨人「ハンゼン氏病問題 その歴史と現実、その文学との関係」『新日本文学』一九五七年七、八月。
- (13) 太田正雄「動画「小島の春」」「日本医事新報」一九四〇年八月。ちなみに、太田はこの文中、在宅治療の可能性を示唆し、隔離政策を暗に批判している。大西の論は、太田の言説の一面しか捉えていない。
- (14) 小林秀雄「文芸時評」「東京朝日新聞」一九三九年一月十一日。
- (15) 荒井英子「ハンセン病とキリスト教」岩波書店、一九九六年十二月。
- (16) この点について、「今日よく、『あの時代ではしかたがなかった』『隔離法しか有効な手段がなかった』という、時代的正当性を擁護する発言が聞かれるが、それは歴史の一面しか捉えていない。(註15に同じ)」との別掲がなされていることを申し添えておく。実際、一九〇七年に発表されたレゼー「癩病予防法実施私見」で、その感染力が極めて弱いことはすでに指摘されていた。
- (17) 荒井裕樹「御歌と《救癩》」「文学」二〇〇六年十二月。
- (18) 金井景子「『いのちの初夜』と『小島の春』―昭和十年代のジェンダー編成と文学・序説―」『昭和文学研究』二〇〇〇年九月。

(19) 吉屋信子「汪兆銘に會つて来ました」「主婦之友」一九三九年十一月。

(20) 「主婦之友」一九三七年十二月。

(21) 引用はクリスティー著矢内原忠雄訳『奉天三十年』上下巻、岩波新書、二〇〇八年七月による。

(22) 「新小説『女の教室』元旦紙上から」(『東京日日新聞』一九三八年十二月二十三日) は次のような吉屋の言葉を伝えている。

王さんに久しぶりであへた懐しさ、しかも心の底からうちあけ手を握れない悲しさ、その複雑な気持ちをどうにかして現はさうと思つてゐます。(中略)王さんは今どこにあるのでせう、知りたいものです。

(23) 吉屋信子「漢口攻略戦従軍記」「主婦之友」一九三八年十一月。

*『女の教室』の引用はすべて、『吉屋信子全集6』(朝日新聞社、一九七五)に拠った。また引用文中、今日の人権意識に照らして大きな問題を孕むものがあるが、作品の問題を照射するため、そのまま引用した。

*文中、敬称は略した。

*本稿は、平成19年度科学研究費 基盤研究(C)課題番号一九五二〇一四〇の助成を受けてなされたものである。